

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月10日現在

機関番号：27601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520826

研究課題名（和文） 草原の狩猟—日本における半自然草原の狩猟文化の研究—

研究課題名（英文） Hunting of Prairie “Semi-natural grassland studies of hunting culture in Japan”

研究代表者

永松 敦（NAGAMATSU ATSUSHU）

宮崎公立大学・人文学部・国際文化学科・教授

研究者番号：30382451

研究成果の概要（和文）：従来の狩猟研究は東北地方のマタギや九州地方の山間部の狩猟習俗を研究対象としてきた。総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「日本列島における自然—自然相互関係の歴史的・文化的検討」2007～2011（研究代表者、湯本貴和氏）に参加する機会を得て、阿蘇地方を調査することができたのが、私の研究の大きな転換点であった。阿蘇と同様の視点で諏訪・富士山麓にも足を運んだ。現実的には、生物の個体数維持が大きな要因であることを理解するようになった。

研究成果の概要（英文）：Japanese traditional hunters, Matagi, in the Tohoku region and hunting customs in the mountainous areas of Kyushu region has been focused on in the study of hunting. Investigations on Aso area marked a turning point in my study. These had been carried out as part of Research Institute for Humanity and Nature project in 2007-2011 lead by YUMOTO Takakazu, “A New Cultural and Historical Exploration into Human-Nature Relationships in the Japanese Archipelago”. Though the same hunting on grassland, different ways could be found by investigating Suwa and the foot of Mt. Fuji, comparing from the same viewpoint as Aso. However, I have understood the reason as to manage population in practice since these investigations. Now I strongly recognize a need for joint research with fields of natural science such as biology and ecology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：草原・狩猟・焼狩・阿蘇・諏訪・トシガミ

## 1. 研究開始当初の背景

総合地球環境学研究所において、「日本列島における自然—自然相互関係の歴史的・文化的検討」2007～2011（研究代表者、湯本貴和氏）の調査研究が進められており、半自然としての草原の研究を進めていたこと、また、草原における信仰については、国際日本文化研究センターの共同研究「怪異・妖怪文化の伝統と創造——前近代から近現代まで——」2006～2008（研究代表者 小松和彦氏）において、熊本県阿蘇地方から宮崎県高千穂地方における草原地帯の妖怪研究を進めていたことによる。

## 2. 研究の目的

従来の狩猟研究は東北地方のマタギ研究に見られる如くフィールドを奥山に限定してしまつたところに大きなミスがあった。平原での狩猟がいかなるものであったのか、その実態を探ることが必要である。

## 3. 研究の方法

草原地帯の狩猟法を実地調査すること。このため、熊本県阿蘇地方、長野県諏訪地方、静岡県から山梨県に至る富士山麓の中世の巻狩り地を実地調査し、狩猟方法の把握に努めた。それとともに、地球研の研究者と共に草原維持のシステムと生物多様性についても調査を行った。

## 4. 研究成果

国内の草原での狩猟を中心に調査を進めてきた。温帯性の高温多湿な日本において草原を維持することは毎年、野焼き・山焼きを行つて樹木の生育を遅らせ、反自然的に林から森に進化することに歯止めをかけることであった。

従来の狩猟研究は東北マタギの研究に代表されるように調査対象が奥山に絞られた。しかし、中世の富士の巻狩りに見られるように、武士団は馬に乗って弓矢を放つ絵が数多く描かれている。そもそも狩猟とは平原での行為が通例ではなかったのか、こうした疑問が、私を「草原の狩猟」研究に向かわせる契機と

なった。おりしも、総合地球環境学研究所においては、「日本列島における自然—自然相互関係の歴史的・文化的検討」2007～2011（研究代表者、湯本貴和氏）が並行して調査研究が進められており、私も九州班の一員として加えていただいたのは、この研究テーマに気づく大きな原因となった。また、草原における信仰においては、国際日本文化研究センターの共同研究「怪異・妖怪文化の伝統と創造——前近代から近現代まで——」2006～2008（研究代表者 小松和彦氏）において、熊本県阿蘇地方から宮崎県高千穂地方における草原地帯の妖怪研究を進めており、より草原の狩猟の宗教的要素を知る貴重な要因となった。

トシガミを迎える新年において、集団狩猟を行う慣行が南九州では行われる。このときに野火を焼く儀礼を伴うのが、鹿児島県大隅地方の柴祭りと言われる正月行事である。この行事については早くから小野重朗によって精緻な調査研究がなされ（1）、その後、川野和昭（2）や筆者（3）が論及している。

柴祭りは年頭にあって、柴を束ねて神籬とし山の神を勧請して、打植祭（旧薩摩藩内の田遊び）や狩猟の模擬神事などが展開される。柴祭りの狩猟の模擬神事については、奥三河地方の鹿打ち神事と比較され、研究されることが多かった。

筆者は、柴祭りという祭礼の名称は、戦国期からの文献史料によって、「柴」は薩摩地方の神事を指す一般的名称であつて、正月行事だけを意味するのではないことを説き、この神事で作られる神籬の形態が柴七本を束ねるといふもので、これは大隅地方の狩猟文書に記される狩猟の山の神の神籬の形態と一致することから、狩猟作法書に基づいた神事であると結論づけたことがある。このことから、狩猟の模擬行為は山の神のシシ狩り伝承を儀礼化したものと考えていた。

小野の報告を見ると、柴祭りでコッピ（神火）を焚くということがまま見られる。大隅高山（こうやま）郷土の日記『守谷舎人日帳』では正月に各地区で神火が焚かれる事が記されている（4）。

昭和50年代に調査をした佐多町伊座敷では、コッピを焚き、燗をシシ肉と称して焼き、「おいしいシシが獲れてよかった」などと語

り合いながら、祭りが行なわれていた。小野氏は焼畑の火と関係するのではないかと指摘されていたが、川野は佐多町打詰と大浦でヤッガイ（焼狩）の伝承を採集し、山に火を放ち獣を追い出して狩猟をすると共に、焼け跡は焼畑として利用する習俗のあることを紹介している。

筆者も打詰で話を聞いたところ、近隣の辺塚にはかつて広大な牧があり、辺塚牛を算出するところだったという。その野焼きの際に、ヤッガイは行われていたとの伝承を拾うことができた。牧場の草原維持と野焼き、そして、狩猟はセットで行われる慣行であったのである。

狩猟と火は、肉を焼くだけの火だけではなく、焼狩という一種の狩猟法に用いられる火であり、それは野焼きにも焼畑にも利用される火であったということになる。

まさに、大隅地方の年頭における神火は、狩猟、焼畑、野焼き、牧の維持のすべてに関係する人々の生活になくしてはならない重要な信仰対象だったのである。阿蘇の下野の狩の野焼きもまさに神火に該当するとしてよいだろう。

阿蘇で中世まで行われた下野の狩という集団狩猟はトシネの神というトシガミという農耕神を迎える行事の一環として行われた。ここでは野焼き、狩猟、田遊びが連続して行われ、現在は狩猟を除いて「卯の日祭り」と称して3月卯の日から次の卯の日までの13日間行われている（5）。

ところが、中世諏訪上社においても、狩猟による鹿の頭の奉納、田遊び、野焼きの順に行われているのであり、九州阿蘇神社の野焼きと狩猟、及び、田遊びの奉納と同じく、祭礼の構造としては見事な一致を見ているのである（6）。しかも、諏訪社は午の日から次の午の日までの13日間であり、阿蘇神社も卯の日から次の卯の日までの13日間の祭礼であるから、両者は相互に影響しあっていると考えるのが自然ではないかと思われる。

従来、諏訪信仰において野焼きの問題はほとんど取り上げられることがなかったが、最近になって、先にあげた総合地球環境学研究所プロジェクト「日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討—」によって、全国的に野焼きが行われていたのではないかと、黒色土（黒ボク土）の分布と、そこに含まれる有機物がススキやネザ

サなどのプラントオパールが検出されることから、科学的に人工的な野焼きが証明されるようになった。つまり、人為的に野火を放ち、ススキなどのイネ科植物を中心とした草原が各地に広がっていたものと推定されたのである（7）。長野県に関しては、湯本貴和・須賀丈編著の『信州の草原 その歴史をさぐる』によると、諏訪社を含む高島藩領内は『正保信濃国絵図』によればほとんど草原であったと指摘している（8）。

飯沼が12世紀に焼狩の禁止令が發布されたことを『鎌倉遺文』239・526を例証として掲げ指摘している。なかでも、建久2年(1191)の後鳥羽天皇宣旨に、「但本社供祭、有例之漁獵者不在制限」と但し書きをした上で、「焼野獵鹿、非用殺生」と記されており、焼狩は12世においては広く行われていたと推察できる（9）。アメリカ、フリア美術館蔵の六道絵には焼狩の様子が描かれているという指摘もある（10）。しかも、祭礼の贄の捕獲には焼狩は例外として認めるとしているのである。まさしく、阿蘇の下野の狩は祭礼のための贄であり、合法的な大規模狩猟であったとわけである。

おそらく、かつて全国のほとんどの農村でカヤバを維持していた頃までは、野焼き、山焼きをしながら獣を追い出し、集団で狩猟をする様子は至極当然に行われた光景であったと察せられる。つまり、いくつもの集落が関わる野焼きにおいて、害獣駆除が行われたと見るべきだろう。一年に一度の大規模集団狩猟が、地域での人間と共棲できる適度なイノシシ・シカの個体数の維持に多大な効果があったと考えられる。飯沼は縄文時代の狩猟に伴う野火に淵源があると推測し（11）、このような伝統のうえに阿蘇の狩猟が行われ、春の焼狩による狩猟が行われたと指摘している。筆者はむしろワラビなど保存食となり得る山菜などの食料確保のための野焼きが先にあり、野焼きをすることによって動物たちが逃げ惑うところから焼狩が発達したと考えるほうがより自然だと考えている、

従来民俗学研究は筆者も含めて宗教的・信仰的側面を重視する傾向があった。もちろん、年頭にトシガミを迎え祭り、住民が田遊びや狩猟の真似事をすることによって一年の豊作・豊漁を祈願する信仰に依拠していることは言うまでもない。しかし、野火を焼き、大規模狩猟を行うことは、単に神に贄

を奉納するための信仰行事ではなく、牧やカヤバという草原の維持とシカやイノシシの害獣の駆除としての意味合いが強いとみなすべきであると強く主張したい。

注：

- (1) 小野重朗『農耕儀礼の研究』1970 弘文堂
- (2) 川野和昭「大隅と山の神—柴祭りとその周辺」
- (3) 永松敦「大隅半島の柴祭り考—南九州の山神祭祀—」(『尋源』第35号)1985 大谷大学国史学会
- (4) 永松敦『狩猟民俗と修験道』1993 白水社 140-142頁
- (5) 村崎真知子『阿蘇神社祭祀の研究』1993 法政大学出版局
- (6) 武井正弘編『年内神事次第旧記』2000 茅野市教育委員会
- (7) 佐々木章・佐々木尚子「植物珪酸体と花粉、微粒炭から見た阿蘇・くじゅう地域の人間活動の歴史」2011(『野と原の環境史』シリーズ日本列島三万五千年一人と自然の環境史) 文一総合出版
- (8) 須賀丈・岡本透・丑丸敦史『草地と日本人』2012 築地書館株式会社
- (9) 飯沼賢治「火と水の利用からみる阿蘇・くじゅう地域と人間活動の歴史」2011(『野と原の環境史』シリーズ日本列島三万五千年一人と自然の環境史) 文一総合出版
- (10) 斎藤研一「中世動物に見る動物の捕獲・加工・消費」2009 小野正敏・五味彦彦・萩原三雄編『動物と中世 獲る・使う・食らう』高志書院
- (11) 飯沼前掲論文 198頁

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 永松敦「阿蘇・高千穂の鬼八伝説 狩猟・野焼きとの関連性」(小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造 絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで』) 所収、2010、せりか書房、P322-343
- ② 永松敦「マタギ文書の特質—九州狩文書と

の比較から—」(『山と森の環境史』シリーズ日本列島の三万五千年一人と自然の環境史第5巻)、2012 文一出版、129-139頁

- ③ 永松敦 (コラム)「草原の狩猟」(『野と原の環境史』シリーズ日本列島の三万五千年一人と自然の環境史 第2巻)、2012 文一出版、P287-291

[学会発表] (計1件)

- ① 永松敦「阿蘇の卯の日祭り」九州民俗学会 平成22年3月

[図書] (計4件)

- ① 単著 永松敦『九州の民俗芸能 海と山と里と 交流と展開の諸相』、2011、鉾脈社、P1-227
- 2 共著「地域固有の文化の消滅—山村における生業を中心に—」2011、林直樹・斎藤晋編『撤退の農村計画—過疎地域からはじまる戦略的再編—』、学芸出版社、P36-44

- ③ 共著 永松敦『里山・里海の生態系と人間の福利—日本の社会生態学的ランドスケープ—』国際連合大学、環境省、2011、P12-15 Japan Satoyama Satoumi Assessment, 2010、国際連合大学

④ 共著

NAGAMATSU ATSUSHI,  
Satoyama-Satoumi Ecosystems and  
Human Wellbeing: socio-ecological  
Production Landscapes of Japan—Summary for  
Decision Makers. United Nations  
University, Tokyo, Japan. 2010 P21-22

[その他]

ホームページ等

九州民俗学会

<http://ameblo.jp/minzokuhiroba>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

永松 敦 (Nagamatsu Atushi)  
宮崎公立大学・人文学部・教授  
研究者番号：30382451

(2) 研究分担者

なし